

中級作文におけるプランの指導

小 宮 千鶴子

1. 作文におけるプランの役割

まとまった文章を書く場合、何らかの形でプランを立ててから書き始めた方が思い付くままに書くよりも能率的なことを私たちは経験的に知っている。プランはどのような理由で文章作成を能率的にしているのだろうか。

第1にプランは、内容を決定するためのよい方法である⁽¹⁾。文章を書くのは大変な作業であるから、内容を検討するために数種の文章を実際に書いてみるという方法は、能率的ではない。しかし、プランだけなら、ずっと少ない労力でいくつもの案を検討することが可能である。つまり、プランは実際の文章の抽象化されたモデルとして機能するのである。

第2にプランは、モニター機能によって、文章作成が円滑に進むことを助ける⁽²⁾。文章を書くことは、多くの制約を満たさなければならない複雑な問題解決の過程であるが、それに当たる人間は、同時に処理できる情報の量に限界がある。そのため、書き手は常に文章作成過程における現在位置を確認し、自らの行動を制御する必要があるのである。

このような二つの長所によって、プランは文章作成の能率化に役立っているのであるが、このことは外国語による文章作成の場合、より重要な意味を持つてくるのではないだろうか。日本語教育の作文の場合について考えてみよう。

プランが内容決定のためのよい方法であるということは、つまり、プランの段階で内容を十分に検討しておけば、記述後に大きな内容変更が生じる可能性が減り⁽³⁾、その分大幅な書き直しが避けられることを意味する。日本語を母語とする者と比べ、記述に困難の多い日本語学習者にとって、このことは特に重要である。プランの段階で書き手自身が十分に内容を検討するだけでなく、周囲の人々から適切な助言を得ることができれば、さらに書き直しの可能性は減少するであろう。

また、プランがモニター機能によって文章作成を助けるということは、プランがよくできていれば、書き手はプランに従って当面の記述を進めるだけで、能率よく文章を書き上げることができることを意味する。記述に負担のかかる日本語学習者にとって、それに専念できる環境を作り出すことは、特に重要である。

さらに、プランを日本語で書く場合には、もう一つの利点がある。それは、プランの段階で日本語教師など周囲の人々に文法や表現、表記の誤りを直してもらえば、記述段階で発生するであろう同じ誤りを未然に防ぐことができることである。実際の文章の抽象化されたモデルであるプランには、その内容を語る際に鍵となり、繰り返し使用される表現が現れやすいため、特にこの方法が効果的になるのである。

2. 日本語教育におけるプランの指導

プランの仕方は人によって異なる。全体の綿密なプランを立ててからでないと書き始めない人もいれば、書き出しが決まると直ちに記述を始める人もいる。日本語教育の場では、どのようなプランの仕方を指導すべきなのであろうか。

日本人の子供を対象とした発達過程の研究からは、興味深い結果が報告されている⁽⁴⁾。2年生・3年生・5年生・6年生に同じ課題を与えて作文を書かせ、その過程を探ったところ、2年生と高学年の子供とでは異なる書き方をしていることが分かったという。2年生の場合は、書くことについての計画をきちんと立ててから書くか、あるいは、浮かんだままを連ねていくかのどちらかになることが多かったが、作文に慣れている高学年の子供の場合は、テーマや書き出しだけ決めると、あとは文脈に依存して局所的なプランで書きすすめることが多かったとのことである。

ともに日本語学習の途上にあるということから、日本の子供たちと日本語学習者を単純に同一視することはできないが、上記の結果は日本語学習者へのプラン指導のあり方を考える際、大いに参考にすべき内容を持っていると思われる。日本語学習者は、日本の低学年の子供と同様に日本語による作文に不慣れであるだけでなく、低学年の子供なら既にかなり習得している文法や表現なども学習中である。このように二重の困難を抱えた日本語学習者に対するプラン指導では低学年児に対する場合と同様に、記述前に作文全体にわたるプランを立てさせるという方法が適当であらう。学習者が日本語による作文に慣れてくれば、プランの立て方は自然に変わっていくと思われる。

プラン指導の開始の時期は、初級・中級・上級という学習段階のいずれの時期が適当であらうか。本校における実践の結果から、プランの指導は初級後半から可能なことが明らかになったが⁽⁵⁾、指導可能なら指導すべきだとは必ずしも言えない。限られた日本語学習の時間の中で指導すべきことは数多く、日本語学習後

に日本語で文章を書く必要性は学習者にとって大きく異なるからである。本校の場合は、将来日本語でレポートや論文を書かねばならない学習者を対象としているので、早い時期にプランの指導を始め、卒業までにプランを立て文章を書くことを習慣として身に付けさせる必要があると筆者は考えている。

私たちがプラン作りの際に利用する方法はさまざまだが、代表的なものとしてはアウトライン、主題文、ブレーストーミング、KJ法、カード法などがある。これらは経験の中から生まれたものであるが、プランを構成する三つの下位過程「目標の設定」「アイデアの産出」「アイデアの構成」⁽⁶⁾のいずれか、またはいくつかを助ける方法になっていると思われる。日本語教育の場では、どのような方法にそって指導を進めればよいのであろうか。

一つの考え方は、できるだけ多くの方法を紹介し、学習者自身に自分に合ったものを見つけさせようという考え方である。これは、プラン指導の方法は、記述する言語が外国語か母語かという違いに特に影響されないとする立場とも言えよう。これとは反対に、何らかの形で外国語による記述という特殊性を考慮に入れて、指導すべきプランの方法を絞ろうとする考え方もあろう。現在のところ、どの方法が日本語教育の作文指導に適しているかという問題に対する解答は得られていないが、その答は多くの実践の積み重ねの中から出てくるものと思う。本稿では、一般によく知られている主題文とアウトラインという方法を取り上げて、中級段階におけるプランの指導法を考え、指導例を示す。

3. 主題文とアウトラインによるプランの指導

日本語教育の作文では教師が題を出すことが多いが、題は内容の範囲を漠然と定めるだけで、必ずしも書くべき内容を指定するものではない。例えば、工場見学をした後、「工場見学」という課題を出すとする。この題によって書ける範囲は非常に広い。見学した工場でロボットが非常に複雑な仕事をしているのに驚いたということも書けるし、工場の中で働く人の数が自分の国と比べて少ないのが印象的だったという内容でもいい。また、工場見学に来ていた日本人と知りあって友達になったという話もこの題の中に含まれるだろう。

このように同じ題でも書ける内容の範囲は広い。書き手が書きたいことをはっきりと持っている場合は問題ないが、特に書くべきことを持たない場合は、それを決定するという作業が必要になる。上の例なら、まず、工場見学をした日のことをできるだけ多く思い出し、その中から書けそうなことを探っていくという手

順が必要である。そのようにして得られる「表現したいことを明確にしようとするうちに、まとまってくる中核となる考え」⁽⁷⁾を主題と呼び、それを短い文の形に表したものを主題文という。

主題が決まれば、書き手はそれに沿って必要な材料だけをさらに集める。このような焦点を定めた取材が、主題の決定を経ない漠然たる取材と比べ、効率的であることは、言うまでもない。つまり、主題は、「題材・材料を組織化して作品を展開する核になる原動力になるもの」⁽⁸⁾でもある。

主題文を日本語の作文のプラン指導に利用する場合、最も重要なことは、主題文を書かせることによって、学習者にこれから自分は何を表現しようとするのかを自覚させることである。言い換えれば、これは学習者に書く目標を持たせることである。留学生の作文によくある、多くのことを語りながら全体としての意図が不明という文章が生まれる原因の一つには、主題指導の不足も関係しているのではないだろうか。目標を持たせることが直ちに目標の達成を意味するものではないのは言うまでもないが、目標を意識して書かせることは伝達の教育という点からは非常に重要であろう。

主題文を書くという方法は、アウトラインと比べると、実際にはあまり利用されていない方法かもしれないが、日本語学習者に書く内容を意識させる方法としては優れていると思われる。主題文はアウトラインと比べ、抽象度が高く難しいため、指導の開始時期は、早くても初級の最終段階の頃であろう⁽⁹⁾。

主題に基づいて材料を集め整理した後、どのような順で書いていくかという具体的な計画を示したものがアウトラインである。アウトラインは書き手を導くよきガイドである。

アウトラインは、内容がある程度まとまってきたところで書かれるのが一般的であるが、1度で完成するとは限らない。頭の中ではよいと思った計画でも、書いて見ると、大切なところが抜けていたり、無駄な重複が明らかになることもある。書き替えていくことで、アウトラインは成長し⁽¹⁰⁾、よりよいものになっていく。つまり、アウトラインは、文章の「各部分間のつながり、全体の統一的発展、構造的まとまりを確かめるためのチェック・システム」⁽¹¹⁾としても働くのである。

アウトラインの種類は、次の六つに大きく分けられる。それらは、落書きアウトライン・トピックアウトライン・センテンスアウトライン・ブロックアウトライン・パラグラフアウトライン・フォーマルアウトラインである⁽¹²⁾。日本語教育

期間中に教室で指導するという点から考えて、ここではトピックアウトラインとセンテンスアウトラインの二つを取り上げる。

トピックアウトラインとは、各項目の内容を語や句で表したもので、センテンスアウトラインとは、文で表したものをさす。トピックアウトラインは、簡潔性という長所を持つが、他人には分かりにくく、時間がたてば自分でも分からなくなるおそれがあるという短所がある。センテンスアウトラインは、ちょうどその反対の性格を持ち、他人に見せるにも保存するにも適するが、簡潔性に欠ける⁽¹³⁾。さらに、日本語教育の立場から言うと、学習者にとってトピックアウトラインは、センテンスアウトラインより書くのが難しいが、教師としては将来のレポートや論文などの見出しに備えて、トピックアウトラインも書けるようにさせたい。このような事情から日本語教育の場では、やや変則的ではあるが、トピックアウトラインとセンテンスアウトラインを適宜交ぜて使用するのが適当ではないかと筆者は考えている。

アウトラインについて日本語教育の場合に最も重要なのは、学習者にアウトラインを書く習慣を身に付けさせることである。学習者が一人で書くときのアウトラインは、トピックアウトラインやセンテンスアウトラインなどの立派なものではなく、落書きアウトラインで十分であるが、とにかく気軽にアウトラインが書けるように指導する必要がある。そのためには、初級から少しずつアウトラインに慣らしておくことが肝要である。アウトラインは主題文と異なり、具体性の高いプランであるため、初級からでも部分的なメモならば可能である⁽¹⁴⁾。

学習者が自分の力で日本語によるアウトラインを成長させられるようになるのは、アウトラインを書くことに慣れてからである。教師の指導の下にアウトライン作りを数回繰り返せば、学習者は徐々に自力でアウトラインを成長させられるようになる。また、将来もアウトラインの段階で友人や教師など周囲の人々の助言を得るように教えるのも、ストラテジーの指導として忘れてはならない。

4. 中級作文における主題文とアウトラインによるプランの指導

中級の作文の場合、題は決められていることが多い。大学でのレポートなども同様に題が決められていることが多いが、記述までの時間の使い方は両者の間で大きく異なる。レポートでは実験結果の整理や文献読みなど記述前の資料の検討に多くの時間をかけるのに対し、予備教育の中級作文では、学習者がすでに多くの情報と既習の表現を持つ話題の中から表現意欲のわきそうな課題を与えること

によって、できるだけ早く楽に問題の多い記述に入れるようにしている。

本校の中級段階⁽¹⁵⁾の学習者にはどのような指導法が適しているのだろうか。本校の学習者は母国で高校を卒業し、すでに大人の思考力を持っている。また、本校卒業後は大学の学部に進学し、日本語でレポートや卒業論文を書かねばならない。このような点を考慮し、できるだけ学習者自身に考えさせることによって理解を深めさせ、特定の課題を扱いながら、そこで学んだ技能を将来にも応用できるように指導したいと筆者は考えている。そのような指導が本格的に行えるのは、日本語の一応の基礎が終了した中級以降であると思われる。

今年度、筆者の指導したクラスでは、中級の最初の課題で主題という言葉で学習者に初めて紹介し、主題文を書かせた。アウトラインは、実際には初級の後半から部分的に書かせており、今年度は中級の最初の課題でアウトラインという言葉と例を示し、簡単なものを書かせている。したがって、学習者は主題やアウトラインについてある程度の経験とイメージを持っている。このような学習者に対してなら、自分で考えさせるような授業も可能であろうと思い、中級に入ってから2回目の課題についての指導法を考えてみた。

プランの指導の順序は、まず主題指導を行い、主題文を書かせ、そのチェックの後、アウトラインのための指導を行い、アウトラインを書かせ、それをチェックするという流れで進む。以下、この流れに沿って日本語教育として留意すべき点は何かについて見ていく。

(1) 主題指導

大学のレポートでも、日本語教育の作文でも、読み手にとって書き手の伝えたいことが何かははっきりしない文章は、いい文章とは言い難い。主題の指導とは、そのようなことを防ぐために、書き手自身に主題を決定する技術を教え、その結果として主題を意識させる指導である。

主題を決定する技術を教えるには、その要因となることを意識させる必要がある。読み手を特定することは、主題指導のみに限られない有効な方法である。読み手の持つであろう興味や関心、知識の状態に合わせて書く内容が限定させるからである⁽¹⁶⁾。さらに当然ながら、書き手の持つ条件も考慮に入れなければならない。書き手が材料を多くもつ話題なら上手に書ける可能性があるが、そうでない場合は、いかに読み手の関心が高い内容でも、やめた方が安全であろう。読み手と書き手からの条件に加え、分量や時間などの外的な条件も見逃すことができない。

(2) 主題文とそのチェック

決定した主題を短い文の形に表したものを主題文と言うが、主題文を書かせることは、次のアウトラインと並んで、日本語学習者の書き手に自らの書こうとすることをより明確に意識させるステップの一つになっている。

学習者の書く「主題文」は、必ずしも常にその名にふさわしい内容を備えてはおらず、内容もさほど確固としたものではなく、アウトラインになると、全く別のことになってしまったりもする。そのうえ、日本語能力の不足から主題文が書き手の主題を表現しているとは限らない。だからこそ、主題文を書かせることが一つの関門となり、学習者に自らの書く内容を意識させていくよい方法になると思われるのである。

成人が母語で書く場合ならば、主題文は書き手自身のためのもので、教師によるチェックを特に必要としないかもしれない。しかし、外国語教育の中級の学習者の場合、次の理由から教師によるチェックが必要となる。

①主題文の段階で不適当な内容をチェックすれば、記述後の大幅な書き直しが避けられる。②主題文に出てくる誤りを直しておけば、記述の際の誤りを未然に防ぐことができる。③前述の指導を行うために、主題文について教師と学習者との間で不明な点についてやり取りをすることは、コミュニケーションのよい練習となる。

ただし、教師が自分なりにチェックすることと断定的な添削を加えることは同じではない。添削は漢字などの機械的な部分に限り、その他はできるだけ学習者の意図を確認してから直せるよう疑問の形にしておく方がよい。教師が自らの読みを学習者に押し付けるようなことになっては、何のための表現練習か分からなくなってしまうからである。

(3) アウトラインの指導

アウトラインを初めて扱う指導では、まず、アウトラインの例を見せ、アウトラインを書くことの利点を考えさせる。教師がうるさく言うから書くのではなく、アウトラインがいかに有効な方法かを自覚させることによってその方法を身に付けさせたいと考えるためである。

次に、アウトラインと題との関係で最も大切なことは何かを考えさせた後、アウトラインに合う題をつける練習をする。これは卒業の時点になっても題と合わない内容を書く学習者が今まで多かったため、題と内容との関係を自覚させる指導が必要であると痛感したことから来ている。題と内容の関係の実際は複雑であ

るが、少なくとも題に合わない内容を書くことだけはやめさせたい。

最後に学習者自身の主題に沿ってアウトラインを書くのを宿題にする。

(4) アウトラインのチェック

学習者のアウトラインを集め、先に提出させた主題文と合わせてみると、題材そのものが新しくなったり、同じ題材でもポイントの置き方が変わったりして、学習者の揺れている様子が見てとれる。主題文と異なる内容になっていても、それはむしろ学習者の思考が深まったと見た方がよいようである。

アウトラインをチェックし、それについて説明や質問を加えながら一人ずつ返す。アウトラインにチェックが必要なのは、主題文のチェックの必要性と同じ理由からである。

5. 中級作文における主題文によるプランの指導例

ここでは中級前半の「私の国の行事」という課題について、主題文によるプランの指導例を紹介する。「私の国の行事」は、学習者にとって初めての本格的な説明文の課題である。説明は、議論や反論などの一部としても現われ、大学に進学する学習者にとって特に大切なものである。作文の量は特に定めていないが、それまでの量から考えて1200字から1600字である。

筆者のクラスは漢字系の9名の学習者から成り、内訳はシンガポール人3名、マレーシア人3名、香港2名、フィリピン人1名である。(以下、シンガポール人からこの順に学生A～Iとよぶ。)

(1) 主題の指導(20分)

題の規定する内容の範囲は、題によってその程度が異なる。「私の国の行事」という題は漠然とした題材の範囲しか示していないが、「楽しいひな祭り」という題は書くべき内容をかなり規定する。このような題の示す範囲の差は、主題の指導に影響を及ぼす。

「私の国の行事」という課題は、書ける範囲の広い課題なので、まず、どの行事を書くかを決めさせることが問題である。それを容易にするために、課題を次のように設定し、教師が読み手に(異文化の)外国人という限定を付けた。

行事を知ること、その国の文化を理解する一つの良い方法です。あなたの国の多くの行事の中から、特に外国の人に紹介したい行事の一つを選び、その行事のよさを上手に説明しましょう。

読み手を外国人と決めたことから、外国人に紹介する行事にはどんな条件が必要かを考えさせた。それぞれの国らしさがよく出ている行事、代表的な行事を書こうということになった。書き手の側の条件を質問したところ、自分自身に書く材料がたくさんある行事という答えが出てきた。まず読み手と書き手の条件について考えさせたかったため、外的な条件についてはクラスで扱わなかった。

次の主題文の例を読ませ、主題文の書き方を示した。学習者たちが主題文の例を見て書くのは2回目なので、決めた行事の中で何を書くかの決め方については指導しなかった。読み手を決めるのと主題文を書くのは、宿題にした。(使用プリントについては、資料1参照)

(2) 読み手と主題文

読み手を書いたのは、9名中8名で、その中で教師を挙げたのが3名、本校の教師および他の学生を挙げたのが2名、YWCAの「日本のお母さん」が1名、「中国の伝統的な文化が大好きな人」1名、「外国人」1名であった。学習者にとって現実的な読み手である教師と他の学生をあげた者が5名もいたのは、印象的だった。他の学生が現実的な読み手であるというのは、筆者の担当クラスでは作文の清書をクラス内に掲示し、普段から互いの作品を読みあっているからである。もっとも、教師の指示があったため、今回読み手に指定された学生は主に異文化の他クラスの学生であるようだ。

主題文を書いてくるといふ宿題に対して、Cはアウトラインを書いてしまい、Iはアウトラインを書いてから主題文を書いて出したので、それ以外の7名の主題文とその直し方を次にあげる⁽¹⁷⁾。返却のみクラス内で行い、必要がある場合には、質問した。

A シンガポールの独立記念日 (National Day)。祝いの方法がどう変わることを説明します。

本人から宿題を受け取る際に、英語を見て、独立した日のことであることを本人に確認し、「独立記念日」という言葉を与えた。返却の際、下線部についてこのままだと将来の変化の意味になるかと尋ねたところ、将来の変化ではなく既に起きた変化について書くとの答えだったため、「どう変わったか」に直した。

B 冬節、又は重陽節という行事について書きます。この行事の意味や節日中の食べ物やすることなど、いろいろ話しを書きます。

これについては、いろいろ書くというのは分量からいって無理なため、絞るように指導した。これは外的条件にひっかかる例である。下線部を訂正、説明。

- D マレーシアの中国系の正月について書きます。正月の楽しさを説明します。
訂正・質問なし。
- E 中国のカレンダーの九月一日から九日まで、仏教と道教の特別な行事がある。
‘九皇大帝’という行事です。この九かかんでは、道教を信じている人は肉や魚を食べることが避ける。
下線部を訂正，説明。「道教を信じている人は肉や魚を食べることを避ける」というのが主題とは妙だと思い、本当に書きたいことを中心なのかと尋ねたが、そうだという答えだったので、そのままにした。
- F 七月の行事。死んだ人々を大切にしている。おいしい食べ物と大きい人形や紙で作るお金たくさん使っている。戏剧もあります。人々大勢に集めます。
その行事の一部を書いただけで、主題文とは思えない文だが、具体的に書くことをたくさん持っているようである。七月の行事とは何という行事をさすのか聞いた。下線部を訂正・説明し、抜けている助詞を補った。「戏剧」という言葉が何を指すか尋ねると、Fは中国語を書いてしまったのに驚きながら、ドラマのことだと説明した。
- G 「重陽節」という中国の行事について書きます。人々はこの日にすることを説明します。
下線部を訂正，説明。
- H 農歴五月中の端午節について書きます。香港で人々はお祝いする様子を説明します。端午節の歴史
下線部を訂正，漢字の細かい誤りを直し説明。

6. 中級作文におけるアウトラインによるプランの指導例

アウトラインについて教室で指導した後、自分の主題に基づいたアウトラインを宿題として書かせ、教師によるチェックの後に説明しながら返却した。

(1) アウトラインについての指導(45分)

プリント(資料2)を用いて、番号順に指導した。

1のアウトラインを書く二つの利点について考えさせたところ、アウトラインに従って書けば楽に書けるというモニター機能の指摘はすぐあった。教師はそれを「アウトラインは地図のようだ」という言葉で表現した。しかし、もう一つの機能はなかなか出ず、初めて考えついたアウトラインに従って書いていい作文になるかと教師がヒントを与えたところ、一人の学習者がアウトラインをいろいろ

書いてみるのは、いいアウトラインを見付ける方法になると気付いた。

2のアウトラインと題との関係で最も大切なことについては、学習者からは何も出なかった。題とアウトラインが合っていることが大切だと言うと、何だという表情をした。つまり、学習者たちは少なくとも知識としては、このことを十分承知しているものと思われる。

3では花見についての作文の3種のセンテンスアウトラインを示し、「花見」という題で書ける範囲の広さを学習者に具体的に示した。その次に学習者により詳しい題を付けさせてみた。アウトラインAは花見の困る点、アウトラインBは花見の楽しさ、アウトラインCは花見の歴史というように学習者は楽に答えた。

2・3のことから、今回の学習者は題とアウトラインが合っていなければならないことを知っており、かつ、与えられた簡単なアウトラインに合う題を付けることも難しくないことが分かった。

この指導後、各自の主題を基に題を決め、アウトラインを書いてくるのを宿題にした。意味のまとまりから考え、項目は一応4つにした。(資料3参照)

(2) 主題文との関係

主題文を集めたときに主題文を出さなかったCとIを除く7人の中で、アウトラインになって主題文と違う題材に変えたのは、Hだけだった。Hは題材の決定に関してかなり迷いがあったらしく、主題文・アウトライン・記述と段階を追う過程で端午節・重陽節・端午節と題材を変えた。

残る6人は主題文と同じ題材でアウトラインを書いている。主題文を例にならって「正月の楽しさを説明します」と抽象的に書いたD以外は、主題文であげた具体的な内容に別のことを加える形でアウトラインを書いている。

Gのアウトラインは、主題文の内容を残しながら、その取り扱いに新たに歴史的な観点が採用された。

Gの主題文

「重陽節」という中国の行事について書きます。人々はこの日にすることを説明します。

Gのアウトライン

「重陽節 — 伝統と現在 —」

1. 重陽節の起源
2. 昔の人々は、重陽節の日に何をしたか。
3. 現在の人々は、重陽節の日に何をするか。

4. 現在の人々は重陽節をはじめ伝統的な中国の行事の態度を改めている。

Aのアウトラインでは、主題文で書いた内容以外のことがかなり加わり、アウトラインを見る限り、主題そのものが大きく変化したのではないかと思わせる。しかし、日本語学習者の場合、書き手の気持がかなり揺れ続けること、主題文が必ずしも書き手の主題を表さないこと、具体性の高いアウトラインの方が学習者にとって書きやすいことなどから考えると、アウトラインの背後にあるものを記述前の時点での真の主題と考えるのが適当かもしれない。

Aの主題文

シンガポールの独立記念日。祝いの方法がどう変わることを説明します。

Aのアウトライン

「シンガポールの独立日」

1. シンガポールの歴史について説明します。
2. シンガポール人はこの日の前の準備。
3. あの日の行事を説明します。
4. あの日の後何をします。
5. 今と前比べます。良くなりました。とてもいいです。

参加したいが、できません。五年後。

(3) アウトラインのチェック

主題文のチェックと同様に内容から表記・文法まで教師がチェックした後、学習者に説明や質問を行いながらアウトラインを返した。

前頁のGのアウトラインの場合では、4「現在の人々は重陽節をはじめ伝統的な中国の行事の態度を改めている。」の下線部についてその意味を聞き、祝い方が変わったという意味であることを確認した。そのうえで、「重陽節をはじめ」として対象とする行事を作文の最後で急に広げると、十分に説明できない恐れがあると注意した。

Cのアウトラインは次のようなものである。

「新年」

1. 「新年」の行事や準備について書きます。
2. 新年のとき、人々がお年寄の親類に家へ訪問に行きます。
3. 中国系の人々に新年の重要性。

Cの3「中国系の人々に新年の重要性」は、Aの2「シンガポール人はこの日の前の準備」と同様にトピックアウトラインで書こうとして発生した誤りを含む

例である。この例からもトピックアウトラインの難しさが分かるだろう。

内容については、1の行事の説明では歴史・意味・期間などについて書き、次に準備について書くということを確認した。2ではもっと具体的なことを書こうとしているのに、最後の3になって新年の重要性を述べるというのは分かりにくい構成であるので、そのことを指摘し、初めの方で新年の重要性をまず述べ、具体的な説明に入り、その後言いたければもう1度その重要性を繰り返してはどうかと提案した。

EとFは他の学習者と異なり、かなり詳しいアウトラインを書いた。そのため表現や文法、漢字などを細かく記述前に押えることができた。宿題に出す際、詳しいアウトラインも書くように指示したのだが、学習者にはよく伝わっていないかったらしい。記述での誤りを未然に防ぐためには、詳しいアウトラインを出すようよく指導する必要がある。その他の学習者のアウトラインも同じようにチェックした。

アウトラインを受け取った学習者には、それに基づいて下書きをさせ、教師に提出させた。教師はそれをチェックし、学習者に解説や質問、助言をしながら返した。学習者には教師との相談を基に作文を原稿用紙に清書させ、提出させた。教師は清書をチェックし、問題がなければそのまま教室に掲示し、誤りが多い場合にはもう1度学習者に返して訂正させた。学習者には作文だけでなく、内容を分かりやすくするために、写真や絵などを添えて出すように指示した。

次にAの最終的な作文を掲げる。Aは記述の段階でアウトラインの4「あの日の後何をします。」を落とすことによって、独立記念日の約1週間後まで話を広げず、話を記念日当日に限り、5「今と前くらべます。(記念行事のやり方が)良くなりました。とてもいいです。参加したいが、(日本へ来ているので、)できません。五年後。」に続けて上手にまとめている。さらに、5の内容も記述の段階で少々変え、「参加したいが、5年後」が「来年、帰国」になり、すっきりした流れになっている。この変更はA自身によるもので、書き手がさまざまに考えながら記述を進めている様子が見えがえる。Aはこの作文に雑誌の見開き2ページにわたる独立記念日の国立球場の写真を付け、読み手に分かりやすくした。

シンガポールの独立記念日

シンガポールはマレー半島の南にある人口250万の小さな島国である。24年前まで、シンガポールはイギリスの植民地だったが、1965年8月9日に独

立した。それから、だんだん発展して来て、今では豊かな国になった。毎年8月9日になると、人々は独立記念日を祝う。

独立記念日はシンガポール人にとっても大切である。この日が来ると、人々は昔の苦しい生活のことを思い出し、今の豊かで、安定した国を大切に思う。だから、独立記念日の前にはいろいろな準備をしなければならない。毎年、一人の上級士官が選ばれ、その士官がパレードを計画するグループを作る。毎年新鮮な企画を出さなければならないので、非常に大変な仕事だと思う。学校、会社、民間団体がパレードに参加する。これらの団体もいろいろな準備が必要である。例えば、パレードの時に着る洋服や使う道具は手で作ることが多い。また、それぞれの演目に参加する人は1000人以上の場合が多いので、上手にするために、たくさん練習しなければならない。人々はこのようにして、独立記念日を迎える。

長い間待っていた独立記念日がやっと来た。パレードは国立球場で行われる。3時ごろから人々が続々と国立球場に来る。見る人だけで約8万人もいて、出演者は約2万人いる。人々は興奮して、パレードが始まるのを待っている。ちょうど5時になると、大統領が車で球場に入って来る。そして、パレードの号令官がパレードを始める。最初は軍隊をはじめ、いろいろな参加団体が行進する。最終のグループが通り終わったとたん、遠くから十機ぐらいのジェット戦闘機と四機ぐらいのヘリコプターが飛んで来る。二つのヘリコプターの間には大きなシンガポールの国旗が掛かっている。戦闘機の後から青、赤、黄などの煙が出てくる。とてもきれいである。戦闘機が飛んで行くと、四方八方から人々が球場の中央に走って来て、すぐ決まった形に並ぶ。そして、短い時間で、道具を使って、いろいろな形に変わる。その効果はみんなをびっくりさせることが多い。

パレードには、やはりダンスがある。しかし、このダンスは特別である。シンガポールに住んでいる人は中国人だけでなく、マレー人とかインド人とか、いろいろな民族の人もいるので、民族と民族との関係を大切にしなければならない。そのため、それぞれの民族の代表的なダンスの特徴を合せて、一つのダンスを作った。このようなダンスはたぶんシンガポールにしかないだろう。これが終わると、球場にいる10万人の人たちは心から大きい声で、みんな知っている歌を楽しく歌う。この時がパレードの最高潮である。人々は一つになって、シンガポールの将来のためにがんばろうと思っている。こ

の時、もう七時半ごろになっていて、空が暗くなるので、球場はスポットライトで明るくなっている。やがて、スポットライトが少しずつ弱くなり、球場は暗くなる。そして、球場の外側で打ち上げた花火がいろいろな色を出しながら、夜空に美しく散る。パレードはこのように終わる。人々はみんな満足そうな顔をして、家へ帰る。

最近の独立記念日は5年前までと比べると、だいぶ変わって来た。5年前まではパレードの中心は演目だったが、今では、見ている人に参加してもらうようになった。だから、見ている人もパレードに参加して、いっしょに楽しく独立記念日を祝う。来年は25回目のパレードなので、新鮮で、びっくりするような演目が出るだろうと言われている。だから、私は来年の8月ごろ国へ帰って、ぜひパレードに出ようと思っている。

7. おわりに

中級前半の学習者を対象にして、主題文とアウトラインによるプランの指導について見てきた。この二つを用いることによってプランの指導がある程度は可能になることが明らかになったが、問題点も残されている。

大きな問題の一つは、主題文やアウトラインを書く前に、学習者が日本語の表現と結び付けながら、内容を深めていくための話し合いなどの時間が十分にとれないことである。その理由は「作文の時間」にそれほど多くの時間が当てられないことにある。しかし、実際の「作文の時間」には書くことだけでなく、聞くことも話すことも行われるのである。それならば、「作文(だけ)の時間」というとらえ方をやめ、カリキュラムの立て方を再考してみるのも一つの方法ではないだろうか。今後はその方向で作文指導のあり方を考えてみたい。

[注]

- (1) L. Flower & J. Hayes (1980) '*The Dynamics of composing : Making Plans and Juggling Constraints*'. In L. Gregg & E. Steinberg (eds.), Cognitive Processes in Writing, Hillsdale, NJ : Erlbaum.
- (2) 同 上
- (3) 熟達した書き手ほど書き直しを重ね、よい文章に仕上げるという報告もあるが、ここではプランをよく練らずに書くと、後で書き直さなければならぬこ

とが多いという常識的な意味。

- (4) 安西祐一郎・内田伸子(1981)「子どもはいかに作文を書くか？」
『教育心理学研究』第29巻第4号
- (5) 小宮千鶴子(1987)「文章構成法による作文指導の試み」
『日本語学校論集』14号
- (6) L. Flower & J. Hayes (1981) '*A Cognitive Process Theory of Writing*'
College Composition and Communication 32
- (7) 『国語教育指導用語辞典』(1984)教育出版 主題(広瀬節夫, 執筆)の項
- (8) 相原林司(1984)『文章表現の基礎的研究』明治書院 6ページ
- (9) 小宮千鶴子(1988)「初級の最終段階におけるプランと推敲の指導」
『日本語学校論集』15号
- (10) 澤田昭夫(1977)『論文の書き方』講談社学術文庫 106ページ
- (11) 澤田昭夫(1983)『論文のレトリック』講談社学術文庫 128ページ
澤田氏は論文について述べておられるが、他の種類の文章についても言える
ことと思われるので、引用箇所の直前にある「論文の」を省いた。
- (12) 同 上 129ページ
- (13) 森岡健二(1989)『文章構成法』 東海大学出版会
第5章 アウトラインの作り方
- (14) 小宮千鶴子(1987) 前掲論文
- (15) ここでの中級とは、本校の初級教科書を終了した程度をさす。具体的には、
語彙集約1900、漢字600で、基本的な文型の学習を終了した程度をいう。
- (16) 伊東昌子(1985)「手紙文の産出過程」『基礎心理学研究』第4巻第1号には、
書き手が読み手に応じて内容や表現の仕方を変える様子が報告されている。

Teaching of Planning of Composition at the Intermediate Level

KOMIYA Chizuko

Planning is a teachable and effective strategy for composition not only in the first language but also in a second language. This paper shows how to teach two kinds of planning (theme sentences and outlines) at the Intermediate Level.

資料 1

作文 2 - 2 私の国の行事

1989.9.19

行事を知ることは、その国の文化を理解する一つの良い方法です。
あなたの国の多くの行事の中から、特に外国の人に紹介したい行事を
一つ選び、その行事のよさを上手に説明しましょう。

1. 初めにあなたの「書くことを中心（主題）」を決めてください。

例 1 日本の花見について書きます。花見の楽しさを説明します。

例 2 日本のお盆について書きます。人々が祖先を大切にしている様子を説明します。

あなたの主題

2. この行事の説明の作文をだれに読んでもらいたいですか。

資料 3

作文 2 - 2 私の国の行事

氏名 _____

まず、題と大きなアウトラインだけ書きなさい。

次に、外国人に理解させるにはどんな説明が必要か考え、書きなさい。

題 _____

1. _____

2. _____

3. _____

4. _____